

# 可能世界

高木敏美

94年大相撲の九州場所千秋楽、曙と貴ノ花との熱戦は平成の名勝負であった。両者に勝利を収める可能性がそれぞれあった。そして現実には貴ノ花が勝ち晴れて横綱となった。こうした事態を例えば貴ノ花について述べる述べ方に二通りある。「勝利を収めた貴ノ花」そして「貴ノ花が勝利を収めたこと」の二つが。一方から他方へは通常何の異和感もなく移行でき、物なき事、事なき物を想像することは難しい。どちらに強い光をあてるかによって現われる仕方が異なる程度と思われるかも知れない。だがこの二つの観方、述べ方はそれらを可能な人物、可能な事態として述べようとする途端に、極めて強い対照が浮かび上がってくる。

いわゆる可能世界意味論 (possible worlds semantics) では「ある命題  $p$  がある世界  $w_0$  で必然的に真」とは「 $w_0$  から到達可能なすべての世界で  $p$  は真」と、又「命題  $p$  が世界  $w_0$  で可能的に真」とは「 $w_0$  から到達可能な世界が少なくとも一つ存在し、その世界で  $p$  は真」と定義される。しかしここで言及された「可能世界」とは一体いかなるものかについては、意見は様々である。そうした内から「ことの内蔵化」として物を捉えることから可能世界を構想する D. ルイスを取り挙げ、彼の哲学的前提および帰結を確認する作業を試みてゆきたい。

## 1

まず「勝利を収めた貴ノ花」式の述べ方の前提をみてみよう。彼は72年に東京に生まれ、少年期を経て後角界に入り、少しのスキヤンダルに巻き込まれ、今晴れて横綱を張るに至った人物である。こうした様々な時期に色々な事を成し遂げてきた、そうした事の連続、堆積が貴ノ花自身に他ならない。この人物をこのように観るとは、彼を一つの時空連続体、いわば一本の世界線 (world line) として観るということに他ならない。こうした観方は古典電磁気学から相対論へと発展した物理学の進行に触発されたカルナップやライヒェンバッハによって特に強調されたものであるが、哲学的にはいわゆる「実体に対する属性の優先性」として個体を「完全個体概念」(ライブニッツ)、「観念の束」(ヒューム)へと還元する考え方、更には固有名を確定記述句へと還元するラッセルに代表されよう。したがって、「貴ノ花」という名称は、貴ノ花についての完全な記述によって置き換えられることになる。すると個体をその名で指示することとその個体について何か述べることの間の本質的な差異は消えてしまうわけである。となればこうした時空連続体が持つ可能性、他でもありえた存在様式を、自らのうちに受け入れる余地はない。現実には「かくかくしかじかであったこと」が個体が他の個体でなくまさにその個体であることの根拠なのだ

から。したがって可能的個体として存在するにはいまひとつ別の新しい他でありえた個体として丸ごとやり直すしかない。もう一度新たな自己を構成するしかまさに可能性はないといえよう。このような可能世界の捉え方は「可能世界」の父、ライプニッツに遡ることもできようが、ここではルイスの説を確認することにしよう。

彼は言う。「他のあり方である他の世界は存在するだろうか。存在すると私は主張する。私は世界が複数在るというテーゼ、即ち様相実在論(modal realism)を主張する」(Lewis [3], p.2)。彼にとってこの現実世界は偶々住むようになった世界でしかなく、いかもこの現実世界の在り方の様々な可能性だけが可能世界なのではない。1つの可能世界の他でありえた在り方は、直ちにその世界にとっての可能世界なのである。それゆえ「ある一つの世界が可能的にありえた仕方のどれに関してもすべて絶対的に、それはどれかの世界が可能的にあるあり方に他ならないほどに多くの世界が存在するのである。世界について言えることは、世界の部分についてもいえる。一つの世界の部分がそう在りえた実に多くの仕方があり、他の世界は実に多数かつ多様であるから、一つの世界の部分が可能的に在りえたあり方の絶対的すべてに関しても、それはどれかの世界のどこかの部分が実際にある在り方である。」(ibid.)しかし我々はどこかの可能世界の他でありえた仕方としてのいま一つの可能世界(それはこの現実世界であるかも知れないが)などと気の遠くなるような壮大とも、バカげたとも取れるお話しは無視して、現実世界の現実の個体の可能な存在様式としての可能な個体へ、足を地に着けて論を進めよう。私が次のように言ったとき、

(1) 曙が勝っていたかもしれなかった

我々はたしかにその意味を理解していよう。おそらく、現実には敗れた曙その人が、彼自身があの可能世界でニッコリしている姿を想像するであろう。しかし想像できるということと理解できるということとは同じではない。ルイス流に考えれば我々は次のように理解すべきなのである。

曙は現実には敗れたのだから、つまり敗れた曙が現実世界の部分としての住人なのだから、その性質を具体化し背負ったままの姿で丸ごと、勝ったであろう世界に登場することはできない。何故ならもしそうすると、そうした二重生活を送っているとすると、ではその曙とは一体誰なのか、どういう人物なのか。94年九州場所で敗れた曙にとって94年九州場所で勝っていたかもしれない世界とは、その世界の住人として、まさに94年九州場所で勝っている曙として住む世界に他ならない。例を変えてみよう。曙の左手の指が実は6本であったということは、論理的には可能であろう。無論現実には彼の左手の指は5本である。では左手の指が6本でありえたであろうと言うとき理解されるべきこと、即ちその可能世界で彼が6本の指を事実持っているということ、これも判ってもらえよう。では二つの世界で同一の曙が登場するとしたら、彼の左手の指は何本か、5本かそれとも6本か。こういうわけで二重生活は不可能なのである。

こうして現実の個体についてその可能な在り方を提供してくれる可能世界には同一の個体は現われえない。各個体は性質が一つ異なる毎に、一つずつそれぞれの世界に束縛されて(world-bound-individual)住むことになる。こうした者はたしかに似ている、それをルイスは分身、対応者(counterpart)と呼ぶ。したがって直観に反していようとも文(1)で理解すべきは

(2) 曙の分身が勝った可能世界が少なくとも一つ存在する(到達関係は省略する)

となる。こうした分析はたしかになじみにくい。これでは、あの曙についてではなく曙の分身について語っているのではないかと思われましょう。例えばクリプキならこんな風に言うであろう。

(1)の真理条件が(2)で与えられるとしたら、ある状況で曙に極めて似てはいるが曙とは異った別の誰かが勝っていただろう (would have won)。別の誰か、分身に起っていたかもしれない事柄について語っていることになるのである。しかしどれほど自分に似ていようと、別の誰かが別の可能世界で勝利を取っていたかどうかなどは、曙自身にとってはおそらくどうでもよいことであろうと (cf. Kripke [1], p. 45, [2], p. 148)。

しかしこのクリプキの反論は全くの誤解である。我々は(1)で現実の曙について、彼の在りえた仕方を語っていた。正確には、可能な性質を持つものとしての現実の曙について語っていたのであった。そうしたとき何をどう理解すべきかに対する答が、(2)で与えられたのであった。奇妙にもそれなのにクリプキは(2)に登場する分身を、現実世界  $w_0$  では単に可能でしかなかった可能性を、まさに可能世界  $w_1$  で現実化している彼の分身を正しく観てとっていない。この世界  $w_1$  では彼の分身は既に勝利を取っており、勝っていたであろう者としてではなく、まさに勝者として存在しているのだ。このような可能世界があるからこそ現実世界  $w_0$  の曙はまさに勝っていたかも知れないといえるのだ。ではクリプキの誤解で言われていたようなこと、分身について更にそれが持つ可能性について語ることは意味をなすであろうか。無論問題はない。ただし分身は事実その世界  $w_1$  では勝利者なのだからそれとは別の性質に関して、もしそれが在りえた仕方であるならば、とうぜん分身にとっての可能な個体はいま一つの世界  $w_2$  (それは現実世界  $w_0$  であるかもしれないが)に住むことになる。

ところでクリプキの解釈は誤解であると判明したが、しかし彼の言わんとするところも又理解できる。それは何故(2)が(1)の意味でありうるのか、どうして(2)が(1)の理由でありえるのか、といった疑問が沸き立つのを抑え切れないからであろう。しかしそれはクリプキがルイスとは全く異なる、しかも我々になじみの「主語—述語」構造に相応しい「属性に先行する実体」の枠組の中で考えているからに他ならない。他方ルイスの個体像は「かくかくしかじかのもが存在する」といった形で表現されるのに相応しい存在論なのである。実際に各単称名辞を確定記述に書き換えることはしていないが、最終的には、各単称名辞はラッセルの記述理論とスマリヤンによって提唱されたスコープの取り扱いを受け入れて、消滅してしまうべきものである (Lewis [1], pp. 117-121)。それゆえルイスの存在論はあくまで「実体を構成する属性」のそれである。そしてそれはそんなに奇妙でもないのである。現実には敗れた曙が、それ以外の多くの性質ともどもすべて、しかもそれのみを丸ごと現実化した個体であるのに対し、曙の分身は少なくとも一つ、敗れる、という性質を捨て去り、代りに少なくとも一つ、勝つ、という性質を備えている個体なのである。したがって(1)の「曙」は(2)の「曙の分身」の指す個体がいるからこそ、まさに単に敗れただけの個体でなく、敗れはしたが、しかし、勝つ、という性質を現実化することのできたであろうあの曙を指しているのである。そしてこれは我々の直観的理解と大きな隔りがあるわけではない。問題があるとしたら、性質を一つ取り替える毎に、異った世界の少し異った対象として捉える、そうした存在論そのものへの疑問であろう。因みにルイスの存在論では現実世界の曙も生まれてから刻々曙にいわば成るそれぞれの時間的切片の累々とした堆積であり、時間を貫く実体、基体としての曙ではなかった。

ところでいわゆる「世界に束縛された個体」像の持つ致命的な欠陥は、当の個体の持つ性質がすべて、何もかもがその個体の必然的な性質、本質的な性質になってしまうということであった。

世界が偶然的であり、その住人である私のあれこれの性質のほとんどは偶然的と思えるのにもかかわらずである。通常個体  $a$  の持つ本質的性質とは、「 $a$  が存在するすべての可能世界で、 $a$  がしかも  $a$  のみが有する性質」と定義される。すると現実のあのソクラテスは現実の世界しかも現実世界にしか存在しないのだから、ソクラテスが持っている性質はすべて本質的性質ということにならざるをえない。ソクラテスが偶々クサンチッペと結婚したにしろ、その偶然性はクサンチッペと結婚しなかったかも知れないソクラテスが、やはり現実のソクラテスその人ではなく、彼の分身である以上現実のソクラテスにとってははその結婚を本質的なものと考えなくてはならない。あらゆる可能世界にいるソクラテスの、しかもソクラテスのみが有する性質とはソクラテスがこの世界にしか存在しない限り、現実の性質や関係はすべて本質となる。このことは、分身を持つルイスの可能世界にもあてはまる真理である。しかも現実のソクラテスの存在そのものを構成するものが、他ならぬそうした性質に他ならないのだから、その真理を否定することは、あらゆる属性をはぎ取ってもなお存在し続ける基体のようなものを想定することになろう。しかし本質というものをもう少し緩やかに理解し、ソクラテスにクサンチッペとの結婚は偶然であった事を認めてあげたい。そのための分身ではなかったのか。事実その通り、変更されるべきは「本質的性質」の定義そのものである。即ち——個体  $a$  の本質的性質とは  $a$  と  $a$  の分身すべて、そしてそれらのみが共有する性質——であると (Lewis [1], p.120)。こうして偶然性が救われる。

ルイスの「分身関係」とはところで一体どの様な関係なのだろうか。もしそれが反射性、対称性、推移性を満たせば、いわゆる同値類を構成できよう。となればそうした個体こそが世界にあるいみで同一者として存在できるような存在者といえようか。否むしろ「分身」は「交差世界同一性」の問題を避けるために提出されたものであった。もち論、数とか性質といったある種の抽象的な存在者は、特定の時間、空間に位置することなく存在すると同様あらゆる可能世界に同一なものとして存在している。したがってたしかにソクラテスはこの世界にしか存在せず、他の可能世界との二重生活を送ることはできない。各可能世界に存在するのはソクラテスの分身であったし、だからこそ偶然性もこうした分身によって保証された。他方、そうした分身とはどのような存在者であるかという、例えばソクラテスの分身とは、様々な面で重要性や類似性の度合によって計れば、それら可能世界の他のどんなものよりも、重要な点でソクラテスに似ているのだ、と説明されよう。このように、同一性に代りうるものとして提案された分身関係は実は類似性、似ているか否かという極めてあいまいな基準しか持たない概念によって説明されたためにたちどころに反論を買ってしまったのである。だが実はルイスにとってみれば、それは我々自身の「～であったかもしれない」「～でもありえたのに」といった表現のあいまいさをまさに自在にあやつことができ、真理条件を与えるに相応しい柔軟性 (flexibility) に富んだ武器であった。ではそれらを列挙してみよう。

- i.  $a$  は  $a$  の分身であるという反射関係を満たす。
- ii. しかし、 $a$  が  $b$  の分身ならば  $b$  は  $a$  の分身であるという対称的な関係である必要はない (あってはいけないという意味ではない)。類似性は一つの可能世界内での対象と、いま一つの可能世界とのその内部の個体同志の比較であるから、対称性を強制しないでおくわけである。
- iii. もちろん、 $a$  が  $b$  の分身で、 $b$  が  $c$  の分身ならば、 $a$  は  $c$  の分身であるという推移関係を満たす必要はない。私の友人の友人は必ずしも私の友人であるわけではないと同様である。

iv. 更には1つの対象に、二つ以上の分身がいてもよく、二つのものの分身が1つであってもよい。

v. 又、分身の存在しない場合も認められる。

このように極めて緩やかなものであるが、分身とはあくまでも、各可能世界からみた、その世界を基準としての分身と理解されねばならない。なぜならルイスは現実世界の現実性に絶対的地位を認めないのだから。実際無造作にどれか一つの可能世界に現実性を付与してしまうと、誠に奇妙な具合になることが知られている。次の文を考えてみよう。

### (3) 世界 $w_0$ は現実的（絶対的端的に）

この文はあらゆる可能世界で真、ということになると、他ならぬ「偶然的現実性」というものが消えうせてしまう結果となる。例えば丁度「最善の世界」という性質が世界  $w_0$  に与えられたとすると、その性質はどの世界からみても最善、したがって必然的に最善であり、世界を移動する毎に変わるような性質ではないのと同様に、世界  $w_0$ 、したがってそこに住む人々の行為や出来事のすべてが、現実であることの偶然性を主張しえないこととなる。

他方ルイスはその丁度逆の立場、極端な相対主義者である。「現実的である」という指標語 (indexical term) は「私」、「ここ」、「いま」といった表現を代表的なものとする表現である。こうした表現は、それらの使用規則により、使用されたコンテキストによって系統だって指示対象が決定される。ここで関係するコンテキストとはどの空間地点で、いつ誰が表現を使用するかではなく、まさにどの可能世界で「現実的」という表現を使用するかというものである。世界  $w_1$  に住む人は、その人が「この世界は現実的」といえばその人にとっては世界  $w_1$  が現実世界であり、我々は、我々の世界  $w_0$  を現実的とする。ところで古来より、我々が現実化されていない可能世界の現実化されていない住人ではないことをいかにして知りうるのか、といった誠にもっともらしい問いがあったが、無論ルイスにとって、それに答えるのはたやすい。それは「私は今ここにいる」を知っているのと同様の仕方で我々が現実世界の住人だということを知っているのだと答えることができるからである。したがって、より正確には「現実化」という表現はルイスには相応しくないであろう。むしろどの世界が現実化されたのかというより、私がどの世界の私の分身として、私を取り巻く世界を見渡すかによって、どの世界が現実的で、どの世界が可能な世界なのか決定されると言わねばならない。それゆえ各可能世界は私が偶々いるこの世界と異質なものであってはならず、まさに同種のものでなければならぬ。この現実世界と異った存在論的地位を持つものであってはならない。それゆえまた抽象的なものでもない。ルイス自身、抽象的と具体的との区別を明確でないものとみなしているが、可能世界は明らかに数のような抽象的存在者ではない。現実化されたときにこの世界になったであろうような何か抽象的なものでもないといわねばならない。可能世界は既にどこでもないどこかにこの世界と同種の具体的な世界として存在しているはずである。具体的と抽象的とは世界に相対的な性質ではなく、どの世界でも共通した、多少あいまいではあっても、そのあいまいさをも共有する概念であろう。

## 2

ルイスが様相实在論を選ぶ理由は、ところで一体どのようなものであろうか。ストルネイカーはルイスの立脚点を四つのテーゼに分析、分類した(Stalnaker, pp. 225-234)。

i) 可能世界は存在する。他の可能世界は現実世界と同様に実在的である。ただ現実的には存在しないかも知れないが、にもかかわらず、存在する。

ii) 他の可能世界は現実世界—これは私と私を取り巻くものすべて—と同種のものである。

iii) 「現実的」という表現の指標語としての分析は正しい。

iv) 可能世界は、それより基本的な何かに還元されえないものである。それは例えば各要素文  $p$  につき、その肯定  $p$  かその否定  $\sim p$  のいずれか一方のみを含む文の集合しかも最大無矛盾集合(カルナップ)といった言語的存在者をして、可能世界にとって代ろうとする試みの否定。

このうちストルネイカーは(1), (2), (3)は多少の留保点を認めながらも様相实在論の中核をなすテーゼではないとする。そして(2)こそがルイスの思想の根幹であるとみる。そして、ルイスが与えるテーゼ(1)の説明、可能世界とは物事があったかもしれない仕方、物事がありえたかもしれない仕方であるとの説明は、この仕方を直ちに可能世界と同一視することにより、ルイスのもう一つの考え方、可能世界とは、私と私を取り巻くすべての同種のもっと多くのものであるという説明と相入れないと感じる。もし可能世界が物事のあったかもしれない存在様式ならば、現実世界とは私と私を取り巻くすべてではなくて、そうした物の現にある存在様式であるべきだと。事物の現にある在り方、存在様式はこの具体的などっしりとある世界そのものではなく、世界の性質、ないしは状態というべきものだ。ストルネイカーがある個体と個体の在り方を同一視してはならず、区別すべきだとルイスのテーゼ ii) を批判するのはある意味で正しい。物をことの堆積へと吸収してしまうことの拒否こそストルネイカーをはじめとするほとんどの様相に関わる哲学者の態度なのだから。いずれにしろここで極めて大切な事が明らかになった。つまりルイスにとっては、現実世界と可能世界とが同種の具体的なものであると同様、ストルネイカーにとっては、現実世界の現実の在り方としての現実世界と、現実世界の他であったかもしれない在り方としての可能世界とは同種のもの、つまり共に抽象的なもの、性質や状態と表現される何かであると。たしかにプランティンガにとっても現実世界とは可能世界と同様、抽象的対象であった(Plantinga [2], p. 258)。そしてプランティンガのいう現実世界とは事態、仕方としての現実世界である。おそらく、「命題  $p$  はあらゆる可能世界で真のとき、そのときの  $p$  は必然的に真」という時意図されているのは在り方としての現実世界、一つの特例ではあれ紛れもなく可能世界のうちの一つに数え入れられている現実世界であろう。ストルネイカーは存在様式の存在と様式を区別できるとし、ルイスは様式即存在とみなしているわけである。そこでストルネイカーは、もし様式、性質が例化されないままでも存在できるとしたら、抽象的存在者として具体化されなくとも残るとしたら、世界の在り方即世界という様相实在論を受け入れなくとも、世界の在り方は、いわば実体化されないまま受け入れられようと言う。しかしそれはそもそもルイスの可能世界だけの観方ではなく、現実世界の捉え方からして、彼の存在論の拠って立つ基本的考え方をすべて

否定することとなる。曙の敗北を曙自身を構成する性質にしないで、そういう曙をいわばもっと身軽にしてあげようというわけである。しかしストルネイカーのこの批判はルイスにとってはもち論何の批判でもありえない (Lewis [3], p. 87)。ルイスにとっては、全世界が在りえたであろう仕方そのものこそ可能世界にいわばリアリティを与えるものなのである。そして各個体は集合のメンバーなどではなく、部分として含まれているのであるから、各個体のそれ故存在様式そのものに他ならないのである (*ibid.*, p. 23)。さて当然これ以外にも様々なルイス批判があった。まずは分身関係を支える類似性の基準のあいまいさに対する批判をとりあげよう。

ヒットラーの分身はヒットラーの最も重要な点で似ているのだとしよう。ところで我々にとってヒットラーの最も重要な点とは彼の残酷な政治的役割にある。だとすればヒットラーは清廉潔白な生活を送ることは不可能となってしまうではないか。何故ならその様な清廉潔白な分身などの可能世界にもいそもないから (*cf.* Kripke [1], p. 77)。

しかしあれだけ緩めておいた類似性の基準、分身関係は、常に生き残れるようにも思える。ルイスはヒットラーと同じ起源を持ちながらも清廉潔白な一生を送った分身を用意してこれに答える (Lewis [2], p. 41)。こうした批判は分身関係を同一性関係に代わるものとしたルイスに対する誤った期待から生じてきたものともとれよう。何故なら、同一性関係に代わるものではあれ同一性に近い働きを与えるためにではなく、むしろ同一性の問題から遠ざかる働きを与えるために提案されたのだから。事情はむしろこう考えた方が良からう。我々がある人について、あることについて、他でもありえたかと問う。答えがイエスなら常にそうした人やことについての分身が用意されていると。実際、ルイスは、何が可能で何が必然的かを決定するような理論など他の哲学者同様構想しているわけではない。我々のバカげた想像にも意味を与えることができるということを示そうとするにすぎない。したがって、どういう面で反事実的状况を考えているかによってそれに依じて分身が用意されるのである。では次にプランティンガの批判をみてみよう。これも又「実体の属性に優先」からの批判ではあるが (Plantinga [1], p. 111)。さて次の文を考えてみよう。

(4) すべてのものは自分自身と同一である

これはすべての対象について、自己同一であるという性質を述語づけている。したがって特定の対象にのみあてはまるような性質ではない。

(5) ソクラテスはソクラテスと同一である

これはソクラテス個人についてソクラテスと同一であるということを彼について述べてる。言いかえれば、現実世界  $w_0$  のソクラテスであるものと同一という性質を述語づけている。この二つの言い方は通常はソクラテスに関しては一致する。更に強めてこう言おう。

(6) すべてのものは本質的に自己自身と同一である。

(7) ソクラテスは本質的にソクラテスと同一である。

文(7)はソクラテスについて、本質的に自己同一である、又はソクラテスと同一であるという性質を本質的に持つということをそれぞれ述語づけている。ところがルイス説では自己同一性と、現実的にソクラテスであるものと同一であるということは、ソクラテスに関して一致しないと。もち論その通りである。「ソクラテス」で現実のソクラテス、「ソクラテス\*」で可能な彼以外の分身の一人を指すことにしよう。自己同一性がいえるのは「ソクラテス=ソクラテス」と「ソクラテ

ス\*＝ソクラテス\*」であって、「ソクラテス＝ソクラテス\*」は真ではない。それ故、ソクラテスは自己同一性を欠くことは不可能ではあるが「ソクラテスと同一である」ということを欠くことができる。しかしこれは不正確ないい方かもしれない。たしかにソクラテスは、現実のソクラテスと同一でないことがありえた。それゆえソクラテスはソクラテスでなかったかも知れない。だがこれは明らかに誤りだと。そうであろうか、ソクラテスはソクラテスと同一でないことははたしてありえたことなのだろうか。

ルイスはこの結論を引きうけるであろう、しかも明らかに正しいとして。実際彼にとっては自己分裂など何も不可能なことではないのだ。私が双子でありえたであろうか。たしかに双子の片方でありえたであろう。この時プランティングなら現実の私と同一である私が可能世界で私の兄という世界、更に現実の私との同一性を持っている私がいる可能世界で私の弟という世界、この二つの可能世界を想像するだろう。だが分身説は異った像を提供してくれる。個体 a の分身は一つの可能世界に二つあってもよかったことを想起こそう。すると、私が端的に二人の人間である一つの世界が想像されよう。私が私の起源の事実、可能なものでもある事実をまさに可能的でしかないものと認めるならば、二人のいずれが私の本当の分身であるかを問うことは意味をなさない。逆に私の双子の息子達は実は同一人物であったかも知れないのである。いずれかがいない可能世界ではなく、端的直接に一人である世界を少なくとも私は想像できる。個体の個性が、その個体が成し遂げてきたことによっていわば生成されるとしたら、そしてそれが偶然的なものであるとしたら、十分に想像のつく世界である。更にルイスの類比は続く。我々が接続法(仮定法)Ⅱ式を学ぶときのあの語法「もしも私があなただったら……」、これを理解し外国語へ翻訳するとき、我々は一体何を理解しているのか。健全な精神はもしも私があなたの立場だったら、と理解するであろう。しかし二つの個体が一つの分身を持つことができた。つまり私とあなたが共通の分身を持つ場合である。すると私の精神的な面に重きを置いた類似性による分身とあなたの肉体的な面に重きを置いた類似性による分身とが同一の場合、たしかに「私があなただったら」ということになる、とまでルイスはいう(Lewis [2], p. 43)。こうなるともう分身関係が誠に自由に、柔軟に働き始めて終には「いかなるものも、自分以外に同一世界では分身を持たない」と要請していた公理まで放棄してしまう(Lewis [3], p. 232, fn. 22)。たしかにルイスにとってみれば、「私が私と同一であること」は偶然的なことになってしまうのである。こうしてルイスの自我 'self' は偶々現実世界のルイスを通してこの世界をみるようになったが、別の可能な世界では誰か別の人、例えばクリプキを通して、逆にクリプキの自我 'self' がルイスを通してその世界を眺めていたかも知れないこととなろう。無論この比喩は自我 'self' を消しさえれば、現実の世界と何も変わりがなく、つまり現実世界そのものに他ならない。同一の現実世界を奇妙な言い方で表現したにすぎない。それ故に、不可能な世界ではないといえよう。

## 3

以上みてきたように、ルイスの説はことを含んだ物という個体把握を現実世界から可能世界まで突き進めた説であり、一段ずつ彼の思考を辿れば、それほど気の遠くなるような奇怪な説でも



ないと、少なくとも私には思われる。もし可能性ということで真正の形而上学的可能性をすべて許そうとし、なんらかの対象の事実性に基づいた、そうした事実から想定した可能な未来世界、既に同一性を保証されている対象にとって可能な時間的な未来世界に限定せずに、可能なことすべてを視野に入れようとするれば、ルイスの説は首尾一貫しているといえよう。無論いくつか理解し難い点も認めねばならないが、健全と見える存在論を一見信じ難いと見える存在論、世界の複数性と交換すれば、たしかに強力な武器がえられることの一端を示すことができたらと思っている。

#### 引用文献

- S. Kripke, [ 1 ] *Naming and Necessity*, Harvard Uni. Press, (1980).  
 [ 2 ] "Identity and Necessity." in Munitz.
- D. Lewis, [ 1 ] "Counterpart Theory and Quantified Modal Logic," in Loux.  
 [ 2 ] *Counterfactuals*, Blackwell, 1973.  
 [ 3 ] *On the Plurality of Worlds*, Blackwell, 1986.
- M. Loux ed., *The Possible and the Actual*; Cornell Uni. Press, 1979.
- M. Munitz ed., *Identity and Individuation*, New York Uni. Press, 1971.
- A. Plantinga, [ 1 ] *The Nature of Necessity*, Clarendon Press, 1974.  
 [ 2 ] "Actualism and Possible Worlds," in Loux.
- R. Stalnaker, "Possible Worlds," in Loux.